

## おわりに

今年は「鉄道事業におけるCSR」と題し、社会の一員として鉄道事業者が果たすべき責任及び社会貢献について考察を行いました。

ここ数年の当会の一橋祭研究は、鉄道事業の直面する社会問題にどう対処し、その中でいかにして最大限の利潤を確保できるか、という経営者側中心の視点に立つことが比較的多かったように思います。しかし今年は、鉄道事業者を取り巻く社会、いわば様々なステークホルダーとの関係をいかにして構築していくか、という経営者と社会両面からの考察を欠くことのできないテーマとなりました。また、CSR自体は企業の利潤に直結するものではないため、CSRと利潤追求との両立について考えるにあたり、その兼ね合いに頭を悩ませることとなりました。どうにか一定の結論を出すに至りましたが、テーマ決定から完成に至るまでの半年という期間は、納得のいく結論を導くにはやや短かったかもしれません。

今回の研究を通し我々は、鉄道事業者も社会の構成員の1つであるというごく当たり前の事実を、改めて実感することになりました。テーマはあくまで「鉄道事業におけるCSR」ですが、扱った内容の中には他の業種にも通じる部分が多数あります。どれほど力を持った鉄道事業者においても、規制産業という地位に安穏とし、独善的な事業運営を行ってはいは、やがて顧客をはじめ社会全体の信用を失うこととなります。ステークホルダーとの関係を重視し、社会から選ばれる企業であるための努力が欠かせないという点は他業種と変わりません。

もちろん、多くの人命を担っていること、沿線地域の繁栄や衰退の鍵を握っていることなど、鉄道事業のもつ特徴を考慮した上で、他業種とは異なる鉄道業界独自のCSRについて考えることも忘れてはなりません。特に重要となるのが昨年以前の研究にも登場した「公共性」の概念です。鉄道事業は一般的に公共性が強い事業であると言われます。しかしながら、何ををもって公共性とするかという議論についてはまだ結論が出ていません。ですが、鉄道事業者の主なステークホルダー、トピックとして挙げられるものを振り返

ると、顧客や地域社会など「公共」という言葉に関連したものが多いの事実です。CSRの中でも、そうした「公共的」ステークホルダーとの関係を重視すべきなのは言うまでもありません。

またそれと同時に避けることが出来ない話題が「安全」に関するものです。2005年のJR福知山線脱線事故が社会に与えた衝撃は大きく、2年半を経過した現在も鉄道業界は信頼回復と事故予防体制の構築の途上にあります。鉄道業界、ひいては交通業界が失った安全性への信頼を取り戻すべく、事故再発の防止に全力を投じることが求められています。

我々が研究に携わっている間、食品業界では産地や賞味期限の偽装など、商品ブランドの信頼を根幹から揺るがしかねない不祥事が相次ぎました。各社ごとに事情は異なるでしょうが、利潤を追求する中での順法意識の欠如や不透明な経営実態、同業者や他業界での不祥事を「明日は我が身」と受け取れなかった甘さなどが共通しているのではないのでしょうか。当然これは鉄道業界にも通じることであり、普段からトラブルを未然に防ぎ、法令を順守するという意識を常に持ち続けるべきだと思います。

CSRは、鉄道業界が社会から必要とされ、また信頼される存在であり続けるための活動を促すための1つのきっかけに過ぎません。これまでのように、取り組みのきっかけが重大事故のような犠牲を伴うことは二度と繰り返されてはなりません。各事業者が、自発的かつ積極的に社会に対する責任を果たし、利潤をあらゆる形で社会に還元するという文化を根付かせるためには、企業の努力はもちろん、社会の一員たる我々の関心が不可欠なのではないでしょうか。